

『ヴィレット』にみる都市の快樂

藤田 晃代

序

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の小説『ヴィレット』 (Villette, 1853) は、タイトルが示すとおり、「小さな都市」を舞台にした小説である。主人公ルーシー・スノウ (Lucy Snowe) は少女時代を古都ブレトン (Bretton) で過ごした後、職探しのため単身ロンドン (London) に出て欧州大陸に渡り、ヴィレット (Villette) で女子寄宿学校の英語教師になる。ルーシーの場合、これら三都市での体験の多くは「快樂」(pleasure) を中心とした「快い」(pleasant) 体験として描かれ、それぞれの「快樂」は産業革命によってもたらされた都市化と消費社会にともなう「見る快樂」を経てやがて多面化し、他者と「共有される快樂」にまでたどり着き、最終的にはルーシー自身の経済的自立にまでつながっていく。本稿では『ヴィレット』に描かれる「快樂」を読み解くことで、都市で生きようとするルーシー・スノウの姿にあらたな焦点をあてる。

I 快樂の定義とその展開

i エドマンド・バークとジェレミー・ベンサム

まず、「快樂」の定義から論を始める。*OED* によると “pleasure” とは「快樂を与えるもの、またはそれによって人を喜ばせるもの、すなわち快樂の源や対象」(*OED* 986) とあり、派生語 “pleasant” については「快樂を与える特質をそなえていること、心や感情、感覚に快いこと」(983) と定義している。18世紀において、エドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797) は「快樂」を定義する際、「苦痛と快樂は、我々に影響を与えるもっとも単純かつ生来的

な作法ではそれぞれ疑うもののない性質を持つが、それらは存在するにあたって必ずしも互いに従属するものではない」(Burke 81)として快樂の自立的特性をうったえたが、産業革命を経て工業化とそれにとまなう都市化、消費社会の到来がもたらされた19世紀半ばには、ジェレミー・ベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)による功利主義(utilitarianism)にもとづき、快樂それ自体心地よいものであるゆえにひとつの価値判断の「基準」となる見方は広がっていた。価値判断の基準を決定してしまうことは結果的に彼の言う「最大多数の最大幸福」(the greatest happiness of the greatest number)につながり、ベンサムの思想には今日に至るまで「人々や社会の性質に対する狭量かつ単純化しすぎた見方」(“Introduction” 25)という批判もあるが、本論ではベンサムが快樂を分析的にとらえていたことをふまえた上で、『ヴィレット』の主人公ルーシー・スノウの都市体験にみられる快樂の主題を、都市論との関連づけをしながら論じていきたい。

ii 都市の視覚文化

『ヴィレット』は都市で活動する主人公ルーシー・スノウを「見る主体」とした都市小説である点から論を始める。『ヴィレット』をはじめとする19世紀の作品に描かれる都市のイメージについてバートン・パイク(Burton Pike)は「都市は広義に言えば高度に発展した社会組織の形態である」(Pike xi-xii)と定義した上で「原則として視覚的なもの」(Pike 9)と位置づけているが、リンダ・ニード(Lynda Nead)はさらに「都市空間の表象」(Nead 6)として都市の視覚文化をとらえている。また、デボラ・パーソンズ(Deborah L Parsons)によると、都市の視覚文化については「(その)視覚的効果の重要性が光景や‘見ること’の文化的転回をもたらした」(Parsons 21)とされ、この都市の視覚化に関して「台頭しつつあった消費社会」(21)があった点もあげている。『ヴィレット』の主人公ルーシー・スノウの場合も都市での体験は見ることを中心に描かれるが、これら都市の視覚文化は特にヴィクトリア朝中期以降、建造物や記念碑、商業、芸術、文化施設などあらゆる都市機能に顕著に見られるようになる。⁽¹⁾ 『ヴィレット』の主人公、ルーシー・スノウはこれらを見て体験する主体として描かれるが、この点についてエリカ・D・ラッポポート(Erika D Rappaport)は、「1850年代にシャーロット・ブロンテがルーシー・スノウを創造した際、シャーロットはまさに都市の名所、商業や娯楽を消費する新しい‘都市の女性像’をつくり上げた」(Rappaport 3)と述べている。見る主体ルーシー・スノウについてその都市体験を中心に以下、論じていく。

II ルーシー・スノウの二つの視点と「快樂」

i 「見る主体」ルーシー・スノウ

『ヴィレット』の冒頭、ルーシーが少女時代をブレトンで過ごした日々を回想する場面は街路の描写から始まる。ブレトンは、シャーロット・ブロンテの故郷ハワース (Haworth) にも近い古都ヨーク (York) をモデルにしたとされ、⁽²⁾ブレトンの通りは「日曜、祝日がいつもとどまっているかのような古きよき街路を見下ろす透きとおった大きな窓と張り出したバルコニー」(V 61) から眺められ、「雰囲気はいつも静かで舗道は清潔で私を楽しませてくれた」(61) とつづられる。都市の視覚文化のなかでも都市の眺望が描かれる場面だが、大きな窓は 1851 年の窓税廃止以後、技術の向上もともなって窓が大型化したことを反映したものであろうか、バルコニーはさらに都市の眺望を得る場としての機能を果たしている。ここでは窓から外を見るルーシーは都市の心地よさを楽しみながらも、窓とバルコニーを介することでまだ対象物と一定の距離を置いていることがうかがえるが、ブレトンを離れロンドンに到着後、はじめての朝を迎えたとき、ホテルの部屋の窓からセント・ポール寺院 (St. Paul's Cathedral) の丸屋根を見たルーシーの気分はさらに高揚し、彼女は生きる実感を味わう。

「眺めているうちに、私の内にあるものが動き出した。翼を拘束されつづけた私の魂は半ばゆるんでいた枷をふり切った。私は突然感じたのだ。・・・私はついに人生を味わおうとしていることを。」(V 108)

都市の眺めはルーシーに生きる活力を与える。さらに「高揚と快樂が心に満ちた」(109) 状態でロンドン市内に出て行くが、先に挙げたベンサムは「快樂」を分類、列挙するにあたってその筆頭に「感覚による快樂」(Bentham 90) をあげ、それらにはまた「見る快樂」(90) と「内的な快樂の感覚と精神の高揚」(90) が属する点を述べている。ルーシーの場合、都市の体験はいずれも「見ること」から始まるが、見ることによって満たされ、内面の高揚を得る彼女の姿からは、都市を体験することと快樂は密接につながっていると考えられる。

ii ロンドンを感じる

ルーシーにとって都市の快樂は見ることと密接につながっていることは前に述べたが、彼女にとって都市を体験することはその中心に自ら飛び込んでいくことでもある。ロンドン到着の翌朝、初めて首都の街路に出たルーシーはその時の思いを「意気揚々とした気分と快樂が私の心の内にあった。ロン

ドンをひとりで歩くことそれ自体冒険であったから」(V109)と述べ、パターノスター街 (the Paternoster row) の書店に立ち寄った後、前述のセント・ポール寺院に行き、ドームの上からウェストミンスター (the Westminster)、テンプル・ガーデン (the Temple Garden) に至るまでロンドン中を見渡す。寺院をあとにしたルーシーはシティ (the city) へと向かうが、その時の思いは次のように語られる。

「自由と楽しみの絶頂のなか、私は偶然の赴くままに歩きまわった。そして、どのようにしたのかわからないが、シティの中心地へと入った。私はついにロンドンを見て、感じた。ストランド街へ入り、コーンヒルにも行った。行き交う活気に揉まれていった。勇気を出して横断歩道も渡ってみた。あれもこれも、ひとりで行くことは・・・私に本当の快楽を与えてくれた。」(V109)

ルーシーにとってロンドンとはもはや単に見て楽しむものではなく、自らそのなかに飛び込んでさまざまな体験をする場となっている。彼女にとって初のロンドン体験は新鮮かつ新奇性にあふれたものであろうが、これらは先のペンサムによる「真新しさの快楽、あるいは感覚にうったえかける新しいものに由来する新奇性で満ちた充足感からくる快楽」(91) に相当するだろう。ロンドンの眺望を堪能し、かつ街路を歩きまわるルーシーの姿からは「鳥瞰図的視点」(Rappaport 3) および水平な視点という二つの視点から都市を体験することがうかがえるが、ロンドンをひとり歩きし、その空気に触れ、真新しい体験を快楽として享受するルーシーの姿を通して、シャーロット・ブロンテは都市を自由に体験する個人の姿を明らかにした。

iii 熱烈なシティ

ルーシーのロンドン体験は感覚にうったえかけるものとして描かれている。これは単にロンドンを視覚的に描くのではなく、都市の空気に触れ、快楽を体感する場としてとらえていることからもうかがえるが、特にシティの体験について湧き上がる自らの感覚や実感を前面に表出している点を次に挙げるべきだろう。シティを歩いたときの思いをルーシーは「シティはさらに熱烈だった。その商業、慌ただしさとどよめきは本当のもの、光景そして喧そうだった」(109) と述べ、「ウェスト・エンドも見たが私はシティのほうが好きだ」(109)、「ウェスト・エンドでは楽しめるかもしれないが、シティでは本当に興奮するだろう」(109) とつづける。『ヴィレット』におけるシティの記述についてラパポートは、シャーロット・ブロンテがウェスト・エンド (the

West End) と対比させた点に触れ、「勤勉かつ職業的なロンドンのシティと快樂追求に終始する軽薄なウェスト・エンド」(Rappaport 8) の比較は、「当時新興の開発地であったウェスト・エンドはシャーロット自身の記憶に深く印象づけられていなかったため」(8) としているが、『ヴィレット』ではルーシー・スノウにとってシティ、ウェスト・エンドも含めてロンドン全体が快樂を体験できる場所として肯定的に描かれている。シティを歩いたルーシーは「私はこうして・・・新しい方向性を手にした」(V 110) と述べるが、彼女にとってシティ体験は、ロンドン中心部に飛びこみ、積極的にかかわるのみならず、これから進む方向を決める起爆剤にもなっていると考えられる。ルーシーの体験する快樂は生きる方向性をも示す重要な役割があるといえる。

Ⅲ ヴィレットと快樂の新たな展開

i ベルギーとブリュッセル

ロンドンに滞在した後、ルーシーは欧州大陸に渡りラバスクール王国 (the Kingdom of Labbascur) の首都ヴィレットに向かう。ラバスクール王国および首都ヴィレットは、シャーロット・ブロンテが留学したベルギー (Belgium) の首都ブリュッセル (Brussels) をモデルにしている。⁽³⁾ 1830 年に独立を成し遂げ、当時新興国だったベルギーは、ヴィクトリア女王 (Queen Victoria) の叔父にあたるレオポルド一世 (King Leopold I) の統治下、海峡を挟んで向かい合うイギリスとは関係の深い国であり、都市の整備や近代化が推し進められていた。またベルギー独立以前から数々の国の支配を経てきた首都ブリュッセルは多様な時代の痕跡をとどめる都市でもあった。中心部のロワイヤル広場 (Place Royale) 近くにはフランス支配時代の「新古典主義様式の建造物」(Alexander and Smith 109) が建ち並び、「美しく広い大通り」(109) も通っている。一方、スペイン統治時代のおもかげを残す「古い街の背の高い集合した家々」(109) もある。シャーロットは留学時代、これらブリュッセルの街を見て歩き、そこで体験した出来事を『ヴィレット』の多くの部分に反映させたが、ルーシー・スノウのヴィレット体験をみると、単に都市を見て歩くだけでなく、仕事探しや新たな人々との出会いなど生きるための手段やそこで得られる充足感にいつそう密着したものとして描かれている。都市ヴィレットについて論じるにあたり、まずは、ルーシーにとって最大の目的である仕事探しをみていく。

ii ヴィレットでの仕事探し

ロンドンを離れて船で欧州大陸に渡る途上、出会った少女ジネヴラ (Genevra) に対し、ルーシーは自身の旅の目的について「私のやることは見つけられるところで生活費を稼ぐこと」(V 116) と言い、大陸に渡る目的が仕事探し以外の何ものでもないことを明言する。しかし、彼女にとって大陸へ行くことは「賭け」でもある。ブレトンを離れ、その後、マーチモント夫人 (Miss Marchmont) のもとで働いたルーシーは、夫人が亡くなったあと行き先を失くす。決意して出たロンドンでは前述のとおりはじめて生きる実感を得たが、彼女の目的は欧州大陸へ渡り、仕事を得ることであった。つてを頼りにかつての乳母のもとを訪れた際に耳にした「外国の家で働く英国人女性がいる」(V 105) という情報をきっかけに出立したのであるが、ルーシーは自らの心細さを打ち消すかのように、出立について「私はこれを生きるか死ぬかの冒険ではなく、働き疲れた者に許された束の間の休息とみなそう」(105) と言いきかせる。この言葉は逆に彼女の今後への不安と孤独を浮き彫りにするかのようでもある。ヴィレット到着後、荷物の遅れや暗闇の中、道に迷うなど数々の不安な出来事が降りかかるが、偶然通りかかった建物こそは船上でジネヴラから聞いたベック夫人 (Mme Beck) の寄宿学校⁽⁴⁾ であり、ルーシーはいわば「とびこみ」で職を求める。彼女はいきさつを次のように語る。

「私は知識を広め、生活費を稼ぐためどのようにして母国を離れたか、・・・役に立つことは何でもする用意があること、子どもの世話係や部屋係、自分の力に見合うなら家事も厭わないことを夫人に伝えた。」(V 127)

率直かつ真剣な思いが通じたのか、居合わせた教師ポール・エマニュエル (M. Paul Emanuel) の観相術もあり、ルーシーは学校で雇われることになるが、仕事探しをめぐるこれら一連の出来事は職探しが従来の地縁、血縁によるものから個人と個人の面接によるものへと変化してきていることを示している。ルーシーの場合、特に事前の予約や紹介状もなく当面の仕事を得たのであるからこうした形態のもっとも極端な一例といえよう。いずれにしても仕事を得ることが人生最大の目的として行動したルーシーの姿は都市で生きようとする者の基盤となる仕事探しを詳細に描いている。

iii 昇進、技量、快楽

ベック夫人の子どもたちの世話係 (nursery-governess) として働き始め、外国で働くことを実現したルーシーだが、まだ十分に頼れる相手などいない。

しかしヴィレット行きにあたって彼女は「失うものは何もない」(110)、「私の場合、負けはなく、勝つかもしれない競技」(122)などと強気の表現を用い、不安を押し隠すと同時に自分の可能性にかける決意をあらわにしていた。不安を抱きながらもルーシーには前向きの姿勢が見られ、ヴィレットにたどり着いた時も「退がるよりも前進するほうがよい」(107)とすら決めていた。突然バック夫人から英語の代講授業を頼まれた際は、はじめこそ慌て、うろたえたが、夫人から「行くの？それとも引き退がるの？」(141)と自身が用いたことのある言葉が繰り返されるのを耳にしてあがる気持ちを抑えて教室に向かう。これもルーシーにとっては自分の力を与えられた場で発揮する以外にないという強い思いのあらわれだろう。およそ60人の生徒たちを前に初の授業を行うにあたってひとりの生徒が書いた意味のない英作文を破り捨て、別の騒がしい生徒は別室へと追い出し、その日の授業は滞りなく進んだが、無事授業を終えたルーシーは外から一部始終を見ていたバック夫人に認められ、次の日から英語教師に「昇進」を果たし、賃金も上昇した。この「昇進」はまたルーシーの「技量」磨きにもつながるものであることを次にみていく。

「昇進」をきっかけにはじめた「技量」磨きに関して、ルーシーは自分の変化について率直に語る。

「生徒たちに教えたり、自ら勉強に励んだりで私には空いた時間がほとんどなかったが、そういう状況は快かった。私は自分の能力を磨き、常に使えるようにしておいたことから自分が成功しつつあるように感じていた。」(V 145)

「技量」はベンサムという快樂のひとつであり、「特定のものに対してなされる技量の快樂はそれを使って実施することにある」(91)と実践に重きが置かれるが、ルーシーの場合、教師としての技量を使いつつ、自身も学んでいく過程そのものをも快樂としてとらえている点が注目される。技量磨きや学習の先にある成功することをルーシーは望んでおり、ヴィレットでそれを可能にする場に遭うことは彼女にとって快いもの以外の何ものでもない。将来の目標について彼女は、「経済的な都市」(V 450)であるヴィレットで貯蓄をし、いつか教室を手に入れ、自ら学校経営に乗り出すと決めている。その目標を達成するにあたっては、バック夫人のこれまでに言及する点が注目される。

「バック夫人も一夫人がよく言うのを耳にしたのだがー必ずしも高い地位からスタートしたわけではないのにー今はどうだろう。この屋敷も庭もすべて夫人が自分のお金で手に入れたものだし、老後の蓄えもあって学校もうまくいっている。」(V 450)

ルーシーにとってベック夫人は学校中を支配し監視してまわる強権的な人物である半面、成功した女性のモデルでもある。夫人の半生にならってルーシーは自らを鼓舞するかのように、「勇気をもちなさい。ルーシー・スノウ」(450)と言い聞かせもする。間近にいる人物をモデルにすること自体、彼女の立てた目標が遠い夢物語ではなく、地道な努力で実現可能なものであることを示している。ルーシーのこのような姿勢は技量の実践というベンサムの実験による快楽に加えて、それを用い、着実に目標に向かって歩んでいくというあらたな快楽も見せている。都市ヴィレットはルーシーに成功する機会を与える場として機能しており、快楽は新たな展開を見せている。

IV ヴィレットを「知る」

i 予兆的体験

ヴィレットはルーシー・スノウが成功するきっかけを与える場として機能する一方、ロンドン同様、その視覚文化は物語展開に重要な意味をもつ。ヴィレットは中心部 (Haute Ville) と旧市街 (Basse Ville) から構成され、中心部には王宮や劇場、美術館そして公園など、多くの施設が存在する。⁽⁵⁾ ベック夫人の女子寄宿学校はヴィレットの中心部に位置しており、学校内での仕事や学習に集中するルーシーの姿からはそれら都市の視覚文化がもたらす快楽はしばらく脇へおかれているように見える。しかし彼女は学校の庭に佇み、「(寄宿学校は) 市の中心地にあり」(V 175)「公園までは歩いて5分」(175)、「王宮など豪華な建物までも10分とはかからない」(175) 場所に位置することに言及し、「すぐ近くには明るく照らされた広い通りがあり、オペラや舞踏会に向かう馬車が行き交って、今ごろの時間帯は活気に溢れている」(175) と街路のにぎわいを伝える。彼女はまだ見たことのないヴィレットの視覚文化について、快楽ととらえつつも、叶うのであればいつか見てみたいという静かな願いにとどめている。しかし、あたかもそこにいるかのようなヴィレットの街路の詳細かつ写実的な描写からはルーシーがヴィレットを視覚的に体験する予兆がうかがえるのである。

ii ヴィレットのコンサート

ルーシー・スノウにとって、ベック夫人の寄宿学校で教師の仕事を得たことはひとつの転機であったが、もうひとつの転機として幼い頃をともに過ごしたブレトン親子とのヴィレットでの再会も重要な意味をもつ。校医として

寄宿学校に出入りし、バック夫人がひそかに想いをよせるイギリス人医師、ドクター・ジョン (Dr John) こそはルーシーの幼なじみグレアム (Graham) その人だったのだが、⁽⁶⁾ この思いがけない再会をきっかけに、彼女は学校内だけでなく、ヴィレットの中心部へと行動範囲を広げていく。ルーシーの行動範囲の広がりにはやはりここでも都市の視覚文化が関わるが、ヴィレットでの場合をコンサートに向かう途上の場面⁽⁷⁾ から論じていく。

前述のとおり、ルーシーはヴィレットでの視覚文化について、いつか見てみたいというひそかな思いとして抱いていたが、グレアム、ブレトン夫人とともにコンサートに向かう途上も、「コンサートについて大いなる快楽を期待していたか」というとそうでもない。それがどういう性質のものか漠然としか考えていなかったのもので (V 284) と繰り返し、快楽の実体験としてはそれらをまだ掴みきれていないことを明らかにする。しかし、ここで彼女が快楽としてとらえるものがコンサートのみならずブレトン親子とともに夜のヴィレットへと出かけていく行為それ自体にある点に注目したい。コンサートに向かう途上、ヴィレットの街についてルーシーは次のように語る。

「(コンサートへの)道のりは楽しかった。寒かったがよく晴れた夜の、しっかり閉ざされた馬車の心地よい安楽さ、明るく、親切な相手とともに出かける快楽、大通りを走るときに木々のあいだからときどき光る姿を垣間見せる星々、市の門、通行路とそれを照らす明かり、衛兵の姿、形式上の検問—私たちを楽しませた—こうしたことがら—こういった小さなことがらは私にとっては新しさゆえに独特の刺激的な魅力があった。」(V 284 下線部筆者)

コンサートに向かう途上でルーシーが目にしたものは、都市の何げない光景である。しかし彼女にとってはここでもロンドン同様、見るものの新鮮さゆえに快楽としてとらえられるものになっている。しかし、ヴィレットでは、そうした快楽をともに体験する人が彼女のすぐ近くにいる点が強調される。「私たち」という言葉から読み取れるようにルーシーは都市の快楽をドクター・ジョン、ブレトン夫人とともに共有し体験しているのだ。ルーシーがヴィレットの光景を楽しめるのは親しくしてくれる2人がいるからだということは、つづく彼女の言葉、「まるで私が2人の親族であるかのように率直に親切だった」(284) という言い方からもうかがえる。ルーシーは見たいと願っていたヴィレットの視覚文化の中心へと向かう際、快楽を共有することで実体験に至った。

ドクター・ジョンにエスコートされながらルーシーは人々で賑わう「光り

輝く巨大な建造物」(285)の会場に着き、「堂々とした階段を上り」(285)、深紅や白、金を基調に内装の施された「円形の壁」(285)と「ドーム天井」(285)をもつホールを目のあたりにする。ここではじめてルーシーは音楽会の舞台、集った人々、観客を見渡し、また自らもその一員となることでコンサート全体を視覚的に「体感」する。「あの幸福な晩」(300)の出来事として長く記憶されることになるこのコンサートは、ルーシーにとってヴィレットの視覚文化は快楽として他者と共有され、共に過ごした時として記憶にとどめられるものであることをあらわしている。

iii ‘快楽を与える快楽’

ルーシーがヴィレットを視覚的に体験する機会を得られるようになったのは、ブレトン親子との再会がきっかけであったことは前にも述べたが、ブレトン親子についてルーシーは、「快楽をあたえる手だては自発的に2人にうかんでくるのだった」(271)と述べ、「2人と過ごす間は毎日ちょっとした計画がもちあがり、結果としてそれは私にとって有益な楽しみとなった」(271)とつづける。これらの言葉は2人がルーシーに快楽を享受する場を提供する存在であることを示している。特にドクター・ジョンについては、その交流を通じて彼女がヴィレットを体験する指南役となる点を見ていきたい。

ドクター・ジョンとの再会以降、前述のコンサートだけでなく、ルーシーのヴィレットでの行動範囲は広がっていき、「(ドクター・ジョンの)案内で、私はより多くのヴィレットを、その周囲を、住人たちを見る結果になった」(271)とあるように、彼女のヴィレットへの関心は高まっていく。そしてルーシーはドクター・ジョンが「ヴィレットを知りつくしている」(273)ことに驚かされ、「広い通りのみならず、・・・見る価値のあるものを収蔵した博物館からホールまで」(273)さらには彼の職業柄、出入りする機会のあった「旧市街の、より貧しく混みあった界限まで」(273)足を運ぶ。寄宿学校とその周囲のヴィレット中心部しか知らなかったルーシーにとって、これはヴィレットの全体像を掴む経験であった。ここでドクター・ジョンはいわばルーシーがヴィレットを「知る」ための指南役となっているといえよう。彼の彼女に対するこれらの振る舞いは単に再会した幼なじみを元気づけようとしているのではなく、彼女に対する友好の念からきているものであろう。この友好も先に挙げたベンサムによる快楽の分類に列挙されており、友好の快楽については、「ある特定の人に対して、あるいは言葉のとおり彼／彼らと親しい人に対して、そしてその結果、自発的、好意的な利益をその人にもたらすこと

になる相手に対して信念をともなつてなされる快樂である」(Bentham 91)と定義している。ドクター・ジョンの一連の振る舞いはこのベンサムの定義に重なるものであろう。しかし、『ヴィレット』では、彼の好意がそれを受け取るルーシーにとっては都市ヴィレットをよりよく知る機会に直結し、知ることの快樂へとつながっている点、さらにドクター・ジョンにとってはヴィレットを多く体験する機会をルーシーに対して与えること自体が快樂であるという複雑化した状況がここでの友好の快樂という問題をより深化させていると考えられる。

V 快樂のさらなる深化

i ポール・エマニュエルとルーシー・スノウ

ルーシー・スノウのヴィレットでの生活は、経済的自立を目指すことが第一目標であり、この姿勢は終始変わらない。ルーシーはヴィレットでいつか学校開設を実現するために働き、経験を積むかたわら都市の視覚文化を堪能し、このラバスクール王国の首都をよりよく「知る」に至った。『ヴィレット』におけるルーシー・スノウと都市の快樂をめぐるのは、他者との交流を通じて共有される快樂という新たな側面があることも見てきた。この共有される快樂についてルーシーともっとも深化した関わりをもつのがポール・エマニュエルである。ポールの存在はヴィレットの深部へと入り込むルーシーの姿を明確にし、彼女が都市で生きようと決意する方向づけに欠かせないものになっていることを次に考えたい。

バック夫人の学校で修辞学を担当するポール・エマニュエルは気難しく、怒りっぽい人物として描かれるが、彼は観相術を用いてルーシーを雇う決断を下すなど、校内での重要な決定事項を任される場合もあり、その意味では信頼をおかれている人物である。学校劇での主役の急な病欠の際も彼はその独断でルーシーに代役をまかせ、うまく役をこなした彼女は結果的に自身の思いもよらない能力に気づくことになり、余裕と自信をもち始める。ルーシーの思わぬ能力を見抜き、それらを引き出したポール・エマニュエル、ヴィレットで生活するうちにやがてポールの思いがけない過去を知ることになるルーシーの間には最終的に友好を超えた兄妹愛が芽生える⁽⁸⁾。ポールとルーシーの関係について、まずはこの学校劇の代役から見ていく。

バック夫人の誕生日 (the fête) に行われた学校劇ではポールは突然の代役をルーシーに迫る。人前での演技、しかも慣れないフランス語での演技とき

いて怖気づくルーシーに対し「答えは何だ。イエスかノーか」(203)と有無を言わせない彼の態度は、選択をさせるというよりも代役として出演する意思を半ば強要しているようである。ルーシーははじめ怖気づきながらも、激しく迫ってくるポールの真剣な目に「ある種のうったえかけもの」(203)を読み取り、出演を申し出る。人前に出て演技をすることに対して極端な怖れを抱いていたルーシーだが、演技の最中に自身に起こった変化を分析的にとらえ、「・・・気乗りしないまま、周囲を気にして私は他人を楽しませることを引き受けたが、まもなく熱がこもってきて、興味も湧いてきて、勇気をふりしぼると私は自身楽しむために演じていたのだった」(211)と言い切る。この言葉はルーシーが自分の思いがけない一面を「発見」したことから出たものであることはつづく言葉、「劇的表現をしたいと願う強い思いが私の性質として姿をあらわした」(211)という一節から明らかである。自身、思いがけない一面を客観的にとらえることはそれ自体快樂といえようが、劇の後に行われたダンスにおいて「快樂の申し子」(211)ジネブラの踊る姿を目の前で展開するスペクタクルとしてゆっくり眺める心の余裕にもそれはあらわれている。劇の代役によって思いがけない力を発揮したルーシーは自信と余裕を手にしたが、そこには彼女の能力を見抜いたポール・エマニュエルの技量があった。

ii 快樂をめぐる変化

ルーシー・スノウはドクター・ジョンとの再会以来、ヴィレットの都市文化を多く体験した。いわばヴィレットの中心部の視覚文化体験にはドクター・ジョンとの交流が多いに関係していた。しかし、ルーシーのなかでポール・エマニュエルの存在が大きくなり、ドクター・ジョンももう1人の幼なじみ、ポーリーナ (Paulina) との再会を経て彼女との親密さを取り戻しはじめると、ルーシーと都市の快樂をめぐる2人の関心に変化が生じてくる。ドクター・ジョンからポール・エマニュエルへとルーシーの関心が変化するにつれ、彼女のヴィレット体験も中心部、表層的なもの、華やかなものから旧市街のなかでも深部へ、さらにはヴィレットの「過去」の部分へ入り込むなど変化を遂げる。ルーシーのドクター・ジョンに対する微妙な距離からポールの過去をめぐる旧市街体験への流れを見ていく。

ドクター・ジョンと友好の念を深めていたルーシーであるが、彼との間に微妙な心的距離が生じ始めたのはヴィレットでの生活も十分に経験した頃である。ルーシーを視覚文化の中心へといざない、‘快樂を与える人’として存

在感を見せたドクター・ジョンは、彼女が単に都市の快樂を快樂として受動するだけの、おとなしく従順な人物という誤解を抱いていた。彼が抱く誤解はルーシーの言葉、「私は（彼が）私の性格と性質に対して思い違いを抱いていると知った。彼は私にいつも私の役ではない役をつとめさせたかったのだ」（V 404 下線部筆者）に如実に表されているだろう。ルーシーの隠れた能力を引き出すために彼女の本意ではない劇にあえて出演させたポール・エマニュエルと異なり、ドクター・ジョンにとってルーシーは彼自身の快樂をいわば共有する役回りを演じてくれる人物であってほしかったのだ。これまで見てきたように、彼女は都市の快樂を単に受動する身ではなく、むしろそれらを積極的に体験し、語る側であった。そのなかでヴィレットでの成功をおさめようとしている自身について「私は上昇しつつある。かつては年老いた夫人のコンパニオン、それから部屋付きのガヴァネス、そして今は学校教師だ」（394）と自らの足跡を振り返るのも、自分の力で開拓していったヴィレットでの地位があるという自負あってこそ出てきた表現なのだ。前述したように、ベック夫人のように高いとは言えない地位から始めた人物をモデルケースとし、ドクター・ジョンのように「その人生において幸運の人だった—成功の人だった」（405）といわれる恵まれた境遇と彼女のこれまでの足跡とは相容れない部分があることは、ルーシーのヴィレットでの生き方を当初から方向づけていたのだ。

ドクター・ジョンは、ルーシー・スノウがヴィレットでの視覚文化を体験する機会を提供したが、彼とともに過ごした日々はルーシーによって確実に記憶され、語られていく。彼は確かに彼女がヴィレットを体験するための指南役であった。その点では彼女の都市体験に多大な影響を与えている。しかし、そうして得たヴィレット体験はその多くが表層的なものであることが、ポール・エマニュエルの過去も明らかにされる旧市街の描写によって浮上する。旧市街へ赴き、ヴィレットの深層部の体験が都市で生きようとするルーシーにとって決定的なものとなることを次に考えたい。

ベック夫人にたのまれ、夫人の古くからの友人であるワルラヴァン夫人（Mme Walravens）に届け物をするためにルーシーが旧市街を1人で訪問する場面は、ヴィレットの深層部を体験する出来事として意味をもつ。「古く、いかめしい旧市街へと長い距離を歩くことは、私はどちらかといえば好きだった」（479）という彼女の言葉には、旧市街に向かっていく好奇心と期待が表れているが、ルーシーはここで“prospect”という言葉を使っており、この言葉には「期待、眺望」という両方の意味があることから、彼女は1人で

旧市街を見て体験することに良い印象と積極性をもっているといえる。ワルラヴァン夫人の家近くに着くと周囲の様子を次のように語る。

「(ここは) 通りなどではなく、どちらかといえば広場の一部だった。静かで家々は大きく、たいへん古かった。家の後ろには木々があり、裏手に庭があることを示していた。古めかしさがこの地域を支配していた。ここから商業的なものはすべて追放されていたが、かつてこの界隈を裕福な人々が支配していたらしく、過去の繁栄が腰を据えていた。」(V 479)

ヴィレットのなかでも古い地域の描写であるが、繁栄は過去のものとなり「古く、半ば廃墟と化した尖塔」(479) をもつ教会にあらわされる静けさと暗鬱さが広場に影を投げかけ、人の気配の途絶えた「打ち捨てられた場所」(480) に足を踏み入れたルーシーは同時代のなかにヴィレットの過去を見ているといえる。彼女はまたここがかつて繁栄した地域であった点に触れ、都市ヴィレットの歴史に間接的に言及もしていることが注目される。過去の足跡はそれに触れる者に常に歴史を伝えるが、ルーシーが旧市街で触れたのも繁栄した過去という都市の歴史の断片であった。パーソンズは、「都市を歩くことは、現代性と過去との出会い、新しいものと未知のものとの出会いだけでなく、そこにとりつくゴーストとの出会いである」(Parsons 10 下線部筆者) と述べたが、ヴィレットの中心部から旧市街へと足を延ばすなかでルーシーが見たものは同時代に立ち現れた過去という‘ゴースト’であった。

過去という‘ゴースト’はポール・エマニュエルの身にかつて起こった出来事を知ることですらに具体化する。ワルラヴァン夫人を訪問したルーシーは雷雨によって足止めされるが、近隣に住む司祭からポール・エマニュエルの過去を聴く。彼はかつてワルラヴァン夫人の娘マリー (Marie) と婚約していたこと、結婚に対する親族の反対、マリーの死、一家の没落とそれにとともに元婚約者の家族への生活援助は彼の自己犠牲の側面をあらわにする。ルーシーは気難しさの一方にある彼の本質を知った。ポールは寄宿学校のある華やかなヴィレット中心部と繁栄は過ぎた旧市街、さらにヴィレットの「現在」と「過去」をつなぐ存在として存在感を増大させる。ルーシーの旧市街体験は彼女とポールをめぐるヴィレットの深層部との出会いであった。

iii ルーシーとポールの‘兄妹愛’について

ポールの過去を知り、ヴィレットの深層部に会ったルーシーにとっては彼こそが「英雄」となるが、2人の関係は旧市街での出来事をきっかけに、

ベンサムの分析をも超えた包括的な快樂にまで高まっていく。旧市街体験を通じ、ヴィレットの深層部に触れたルーシーはそれを「知っている」ことをポールに告げる。

「ムッシュー。私は知っています。」

「何を？多くを、だろう。でも私のことではないだろう。」

「ムッシューは旧市街にあるすてきな広場にあるすてきな古い家をもっています。なぜそこへ行って住もうとしないのでしょうか。」(V 498) ルーシーは「すてきな」にあたる語に“pleasant”という言葉をあてている。“pleasure”の派生語であるこの言葉は、ここでは旧市街に対する愛着よりむしろポールへの愛着を表現しているといえないか。彼女が旧市街について知っていることは彼の「秘密の部分に入り込んだ」(499)行為であり、ここではポールの過去をめぐる、彼の人となりもすでに知っているという明白な告白である。この告白が2人の友情をめぐる包括的な快樂につながる点を最後に論じる。

ヴィレットに到着した当初、知り合いもなく、アウトサイダー的な存在だったルーシーは、仕事を得て生活の基盤を築いていく過程で周囲の人々を通じ、ヴィレットを体験していった。彼女の体験はポール・エマニュエルの本質を知ることをきっかけにさらなる核心部分に入っていく。これは彼との友情を確認しあう場面からはじまる。ルーシーを前にしてすべて明らかになったと確信したポールが「怖れずに、私を信じて—私を信頼していいのだから」(500)と前置き、ルーシーに友情の誓いを求め、「ムッシューが私に友を求めるなら私もムッシューに友を求めます」(500)と彼女が返すやりとりを経て2人は「本当に親密な—血縁以外のつながりをもつ兄妹」(500)となる。彼との友情を確認したあと、ルーシーは次のようににつづける。

「彼が話すあいだ、その声の調子、その愛情のこもった目に浮かんだ光はこれまで感じたことのない快樂を私に与えたのだった。彼の恋人だろうと花嫁だろうと妻であろうともう誰も私はうらやんだりしなかった。私は私の献身的な友人に十分満足していたのだから。」(V 501 下線部筆者)

彼女のこの言葉は、信用できる相手を得たことを意味している。十分すぎるほど信頼できる友人は、ヴィレットでひとり生きようと決意したルーシーが目標を達成するために必要な存在であった。彼女がここではじめて感じた快樂とは、彼女がさまざまな都市の快樂を経て最終的に到達した、そこに自分の存在価値を確信した意味でも、これまでのあらゆる快樂を超えた、包括的

な快樂であつた。

ルーシーがヴィレットに渡つた目的は、仕事を見つけて経済的自立を果たすことであつた。教師として働くうちに学校開設という具体的な目標を掲げることになったが、ルーシーのこの最終目標の実現に向けてポールは支援役にまわる。ルーシーの学校開設のためにヴィレット郊外のクロティルド (Faubourg Clotilde) に住居付きの教室を借り入れたのはポールであつたが、この場所を生活と仕事の場として経済活動の場にしていくのはルーシー本人である。これが2人に「捧げられた快樂」(585)の結末であつた。彼女は教師、学校経営者という専門職でもってヴィレットでの自立を果たすことになる。このルーシーの住居兼学校はかつてプレトン家があつた通りを彷彿とさせる「整然として、清潔で気持ちの良い」(585)街路にあり、「フランス窓の外のバルコニー」(588)からいつでも出入りできる庭が取り囲み、「噴水が立ち上り、小さな石像も置かれている」(588)その庭からは周囲の土地も見渡せる。ルーシーは目標としていた家と学校、そして庭というバック夫人同様のものを手に入れたのだ。これら風通しもよく、周囲を見渡せるルーシーの学校はすべてを監視下に置くバック夫人の学校と異なり、自由な空気と雰囲気をも物語っている。この学校の維持、発展は彼女の経営手腕にかかっている余地が残されているのは、都市の自立した女性、ルーシー・スノウの姿を強調する。経営はうまくいき、やがて通学生だけでなく寄宿生も受け入れるようになる。物語の最後、ワルラヴァン夫人と一家の財産を守る名目で西インド (the West Indies) へ渡つたポールは約束の3年を経過してもヴィレットへ戻ることはなかった。⁽⁹⁾ 結果的にルーシーはヴィレットに1人残されるが、孤独に苛まれる姿よりもヴィレットで生き続ける彼女の姿を強調したシャーロット・ブロンテは、都市で生きる新しいタイプの女性像を表現した。そうすることでヴィレットはルーシー・スノウの居場所としての、より立体的な、生きた都市へと変貌するのであつた。

結論

『ヴィレット』は都市で生きる選択をしたルーシー・スノウを主人公に据えた都市小説であり、彼女の都市での体験を快樂という点から分析すると都市を視覚的に体験する主体から経済的自立を果たす個人になるまでを包括的にとらえることができる。産業化、都市化の著しいヴィクトリア朝中期において、都市の自由を享受し快樂として経験し、それらを語るルーシー・スノ

ウは、同時代の新しい女性像を表わしており、シャーロット・ブロンテ最後の長編小説『ヴィレット』の新鮮さにあふれた側面を見ることができる所以となっている。

註

- (1) 『ヴィレット』と都市の視覚文化については拙論「『ヴィレット』の夜景を読む」(『ザルツブルグの小枝』大阪教育図書、2007年7月)でも取り上げているが、都市の視覚文化が特に「つくられたもの」である点は共通して強調したいことがらである。
- (2) ヨークはブロンテ家のきょうだいにとって、幼い頃から話に聞いたり、書物で接するなどロンドンと同様にもっとも身近な都市であった。シャーロットは実際訪問する機会にはなかったが、妹のエミリ (Emily) とアン (Anne) は 1845 年にヨークへの小旅行をしている。
- (3) シャーロット・ブロンテは 1842 年から翌 43 年にかけてブリュッセルの中心部にあるエジェ寄宿学校 (Pensionnat Heger) に留学した。留学の動機は学校開設のために必要な学力を身につける目的が主であり、生活費の安いベルギーのブリュッセルが留学先に選ばれたという。
- (4) この寄宿学校のモデルは留学先のエジェ寄宿学校である。学校長エジェ氏はポール・エマニュエルのモデル、エジェ夫人はベック夫人のモデルとなった人物であった。
- (5) 現在のブリュッセル市内にもこれら多くの施設は当時の面影を残して現存している。前述のエジェ寄宿学校は残っていないが、跡地には現在ブルー・ブランクが掲げられている。
- (6) ルーシーは実際、校医であるドクター・ジョンがグレアムであることに気づいていたもののあまりの自分との境遇の違いに言い出せずにいた。このルーシーの沈黙については多くのブロンテ研究者によって語りの問題と絡めて論じられている。
- (7) 留学中にシャーロットは音楽会に出かける機会があった。当時ブリュッセルではヨーロッパでも著名な音楽家、演奏家が演奏旅行に来ていた。そのため、数々のコンサートが市内で行われていた。
- (8) あまり言及されないが、ルーシーとポールの関係を熟読すると必ずしも結婚を前提としていないことが読み取れる。作中でポールは一度もルーシーに結婚の申し込みをすることなく、友人としての誓いを立てたいと申し出、ルーシーもそれを受け入れるのである。
- (9) 作中でポール・エマニュエルの最期についてはあいまいな結末で終わっている。これにはシャーロットが自身の小説が悲劇としてとらえられてしまうのを最後まで回避したかった意図があったとされる。

引用文献

Alexander, Christine and Margaret Smith. *The Oxford Companion to the Brontës*. 2003. Oxford/New York:

- Oxford UP, 2006.
- Bentham, Jeremy. "Utilitarianism." *Utilitarianism and Other Essays*. By John Stuart Mill and Jeremy Bentham. Ed. Alan Ryan. London: Penguin, 1987.
- Brontë, Charlotte. *Villette*. Ed. Tony Tanner. London: Penguin, 1985. (本論におけるテキストの引用は同書による。訳は筆者による拙訳、括弧内に頁をしるす。)
- Burke, Edmund. "A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful." A *Philosophical Enquiry into the Sublime and Beautiful and Other Pre-Revolutionary Writings*. Ed. David Womersley. London: Penguin, 1998. 49-201.
- Nead, Lynda. *Victorian Babylon: People, Streets and Images in Nineteenth-Century London*. New Haven/London: Yale UP, 2000.
- Parsons, Deborah L. *Streetwalking the Metropolis: Women, the City and Modernity*. Oxford/New York: Oxford UP, 2000.
- Pike, Burton. *The Image of the City in Modern Literature*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- "Pleasant." *The Oxford English Dictionary*. vol. vii. Oxford, Clarendon Press, 1933 ed. rpt. 1970.
- "Pleasure." *The Oxford English Dictionary*. 1933 ed. rpt. 1970.
- Rappaport, Erika D. *Shopping for Pleasure: Women in Making London's West End*. Princeton/Oxford: Princeton UP, 2001.